

「恐れるな、語り続けよ」  
使徒言行録 18 章 1-11 節

コリントの町でパウロはアキラとプリスキラという夫婦と出会います。アテネでの失敗によって憔悴しきったパウロは、彼らとの出会いで安らぎを得たに違いありません。パウロは、この夫婦にどれだけ励まされたことでしょうか。

ところで、パウロがコリントの町にやってきた時、彼の心境はどのようなものだったのでしょうか。コリントの信徒への手紙の中でパウロはこう告白しています。「そちらに行ったとき、わたしは衰弱していて、恐れに取りつかれ、ひどく不安でした。」(I コリ 2:3)と。けれども、その恐れと不安の中でパウロは、ある答えにたどり着きます。それは、人間の知恵で語ることを止めるという決心です。

パウロがなぜアテネでは宣教を失敗したのか？それは、自らの知恵に頼って論じていたからです。パウロは、知恵を求めるギリシャの哲学者たちに自分の力で、自分の知恵で立ち向かって説得させようとしたのではないのでしょうか。それは、主により頼むよりも、人間的な知恵で勝負をしたということです。だから、うまくいかなかった。この体験を通してパウロは、言葉の知恵に頼って語ると、キリストの十字架がむなしなものになってしまうことに気づかされたのです。それゆえ、パウロは、コリントにおいては、人間的な知恵を用いて語るようなことは一切しなかったということです。語るのは、ただイエス・キリストのみ、それも十字架につけられたイエス・キリスト以外、何も知らないことにしたということです。

そのような宣教の結果、コリントでは、多くの人々がイエス・キリストを信じるようになりました。このことは、パウロが言葉巧みに雄弁に語ったから人々が救われたものではありません。自分の力のなさに打ちのめされ、主の助けなしでは何もできない、そういう弱さを覚えた時に、聖霊が豊かに働くことによって、コリントでの宣教が豊かなものへと導かれたのです。

「神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となる」。失敗者パウロの名言です。主の働きを進める上で、私たちは失敗してしまうことが必ずあります。壁にぶち当たります。でも、それは無駄にはならない。その時に私たちは謙遜を教えられます。その時に私たちは愚かさや罪深さを教えられます。その時に私たちは足りなさを教えられます。そういう経験が重ねられていくと、私たちに誇れるものは自分の弱さしかない。私たちに誇れるものはキリストしかない。そういう境地に導かれるのではないのでしょうか。

さて、そのような中で、パウロが御言葉に専念してコリントのユダヤ人たちに力強く証した時、いったい何が起こったのでしょうか。それは、ユダヤ人たちからの拒絶でした。パウロが力強く十字架のメシアを語れば語るほど、それに対する反発、抵抗は強くなっていきました。しかし、そのような状況の中で、とても奇跡的なことが起こるのです。会堂長のクリスポという人と、その家族がイエス・キリストを信じるようになったということです。けれども、会堂長というのは、ユ

ダヤ教の中では身分の高い、信仰的にも社会的にも尊敬されていた人です。その会堂長が、イエスさまを信じて職場放棄して隣の家に移ってしまったのですから、この会堂に属しているユダヤ人たちが、どれほどパウロを憎んだかは、わかりません。また、おそらく、さまざまな嫌がらせや、敵対行為もされたのではないのでしょうか。迫害と言っても良いでしょう。いつもだったら迫害を逃れて、別の町に移っていても良いようなパターンです。しかし、この時、神さまは幻の中でパウロにこう言われたのです。「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。わたしがあなたと共にいる。だから、あなたを襲って危害を加える者はない。この町には、わたしの民が大勢いるからだ」と。

神さまは、パウロに言われます。「わたしはあなたと共にいる」と。復活されたイエス・キリストは、弟子たちに向かって「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」、そう約束されて弟子たちを派遣されました。その約束が今、パウロにもされるのです。主イエス・キリストが必ず共にいて守り、導いてくださる、その約束によってパウロは励まされ、語り続けることができたのです。

しかしこれよりもっと大事なのは、その後の「この町には、わたしの民が大勢いるからだ」という御言葉です。「わたしの民」とは、神様がご自分の民として選び、召しておられる者たちです。この町にはその民が大勢いる、まだ信じていないけれども、既に神様が選び、これから導こうとしておられる人々が大量にいるというのです。

私たちの伝道は、私たちが自分の力で人々を信仰者にするものではありません。私たちが語るよりも前に、神様が、既にご自分の民として選び、召しておられるのです。そもそも私たち自身が信仰者となったのも、私たちが信じたからと言うよりも、神様が私たちを選び、教会へと、神様の群れへと召してくださり、信仰を与えてくださったからです。その私たちと同じ選びにあずかっている人々が、この町にはまだまだ沢山いる。その人々を見出すために、私たちは語っていくのです。証していくのです。その言葉は、つたないものかもしれません。でも、それで十分なのです。なぜなら、神様が既にご自分の民として召しておられるからです。神さまが定められた時には、そんな私たちの言葉ですら、神さまが、その人にとっての神の言葉として聞かせてくださるのです。

「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。この町には、わたしの民が大勢いるからだ。」私たちが、この御言葉に押し出されて、主を証しするものでありたいと願います。